

## 介護福祉士の卒業教育に関する基礎的研究（2）

三富道子・井上桜・渡辺薫

### Fundamental Research on after Graduation of A Care Worker (2)

MITOMI Michiko, INOUE Sakura, WATANABE Kaoru

#### 1. はじめに

介護福祉実践は、介護を必要とする高齢者及び障害者との直接的な関わりを通じて展開される援助方法である。それ故に、普遍的な人権や尊厳について真に理解でき、なおかつ高い意識を持ち続けることがこの職業には、必要であると考えている。われわれは、介護福祉教育の中で重要な意義を持つ実習の事前事後教育の中で、人権や人間の尊厳を大切にする視点に立った実習プログラムを作成し、1999年度の介護福祉専攻入学生に実施してきた。その内容は、既に学会誌に報告し世に問うてきた。昨年度からは、本プログラムで学習し、介護現場で働く卒業生が直面している課題や問題意識、利用者との関わり方を調査してきた。その目的のひとつは、本プログラムの有効性を検証することである。いまひとつは、卒業後もわれわれがねらいとした人権や人間の尊厳を大切にする視点を持ち続けるための卒後教育のあり方のモデルを明らかにすることである。

これらを通し介護福祉専攻に入学した学生に、入学してから卒業後も連続したプログラムで教育を行なうならば、福祉ニーズに応えられる、より質の高い介護福祉士を育てることが期待できると考える。

#### 2. 対象と方法

##### 1). アンケート調査

1999年度に静岡県立大学短期大学部社会福祉学科介護福祉専攻に入学し、「人権や人間の尊厳を大切にする視点に立った実習プログラム」で学び、2001年3月に卒業した学生全員に現在の状況を調査する。

##### 2). 勉強会の開催

1)の卒業生のうち介護福祉士として働いている卒業生を対象に「人権や人間の尊厳」を意識した勉強会の開催をする。

##### 3). 研究協力者からの助言

本研究は、1999年度から行なってきた「介護福祉教育における利用者理解能力の育成に関する研究」の継続研究である。そのため、1999年度の共同研究者である新潟医療福祉大学村上信助教授を11月、12月に招き、助言を仰いだ。

### 3. 勉強会の内容、結果と考察

第1回は、「ブラジル日系人の高齢者福祉の現状」と題し、7月から9月までブラジルの現地調査を実施した、渡辺が担当した。

第1回のねらいとするものは、以前の日本では典型的なスタイルであった特別養護老人ホームをリアルタイムに見ることで、改めて「利用者」や「介護者」、施設での生活について考えることである。調査時のビデオ映像からは、車椅子への拘束、日本のNHK番組が放送されているテレビの前に集合させられ、居眠りしている利用者たちが映し出されていた。参加者は、ブラジルの現状を理解し、前述したねらいにそれぞれがひきつけて考えることよりも、むしろ遠くの地であるブラジルに圧倒されるばかりであった。

第2回は、「本当の利用者理解ってなんだろう」と題し、井上が担当した。「スウェーデンにおける『痴呆症向け／虚弱高齢者向けグループホーム』の評価モデル例（50項目）」、「ウォッチング2003」（『月刊福祉』2003年、56－63ページ）を資料として使用し、「遺言ノート」を作成する演習を行なった。この回の目的は、次の3点である。

① 利用者とは誰なのか

自分の「老い、障害、死」から考える

② 利用者の人生における専門家とは誰なのか

③ 介護福祉士はどのようにあるべきなのか

利用者のニーズを聴く力や個別の生活に対する考え方を持つということ

この回は、介護を職とする者に利用者をどのようにとらえているのか、自分自身にひきつけて考えることを主眼とした。①については、観念的にはとらえているものの、いざ自分に問いかねられると「なかなか実感できないことである」や「自分自身が死に対して考えていない」など20代の若者には、難しいことであった。しかし、この問いがまさしく職場の中で「『死にたい』といわれても、理解でなかった」と答えた参加者の現在の姿であり、今後考え続けなければいけない課題でもあると気づくことができた。

第3回は、「痴呆症の介護 ―当事者の立場に視点を置いて―」と題し三富が担当した。3月という時期もあつてか、前2回の勉強会からすると最も参加者が少なく、出欠の返事も少なかった。この回は、第2回の延長線上に立ち、当事者である利用者に関心を絞った勉強会にした。教材は、『私は誰になっていくの?』（クリスティー・ボーデン著、桧垣陽子訳、クリエイツかもがわ、2003年）、『痴呆症の介護ハンドブック』（A Hand Book of Dementia Care, Open University Press, 2001）のうち、第5章「痴呆症の人々、その家族、介護者についての展望」（pp. 77－89）である。痴呆症の介護について、介護者側からの書かれた本は、比較的多く見受けられる。それらの本の中には、接し方の方法論のみに終始し、当事者が何を考え、どのようにしてほしいのかをうかがい知ることは難しいものもある。今回用いた教材は、著者が「日本のみなさまへ」の中で次のように述べている点からも、われわれの目的とするものに合致しているため、一部を紹介する。「私たちが痴呆症であっても、たとえそのために理解しがたい行動をとったとしても、どうか価値ある人と

して敬意をもって私たちに接してください」(前掲訳書、2-3ページ)。これは、われわれの研究目的とした「人権や人間の尊厳」について、当事者からのはっきりとした声明であるともいいかえることができる。

介護は、技術や技法を提供する「行為」、あるいは介護機器など「モノ」の提供としてのイメージが強められ、アセスメントツールを学ぶ中で単に細分化された利用者像をあたかも利用者についての正当な理解と思いつく傾向にある福祉現場の状況を残念ながら否定できない。そうした中でこの勉強会に参加した者は、「一人の人間がかけがえのない存在であり、余人をもって変えがたい」ということの意味をすすめて、人権や人間の尊厳を大切にサービス利用者との関係性に立脚した質の高いサービスを提供することを望んでいる。中には、この勉強会で「ほかの卒業生ともこんなことを話したい」とする者もいた。

われわれは、1999年度から「人権や人間の尊厳をたいせつにする視点に立った実習プログラム」を実施し、その有効性の検証と継続した卒後教育を試みてきた。今回行なったような継続的かつ意識的に「人権や人間の尊厳」に着目した卒後教育を行なっこそ、有効性が検証できるのではないかと考える。

#### 4. おわりに

本年度は、2001年3月に卒業した学生で、現在介護福祉士として働いている者を対象に卒後教育の試案として「人権や人間の尊厳」を意識した勉強会を開催してきた。その結果と考察は、3でのべたところである。

アンケート調査については、調査時期とあわせ調査項目の設定が不十分であったため、今回は参考資料にとどめ、最後に勉強会の写真とともに添付した。

# 資料

## アンケート内容と結果

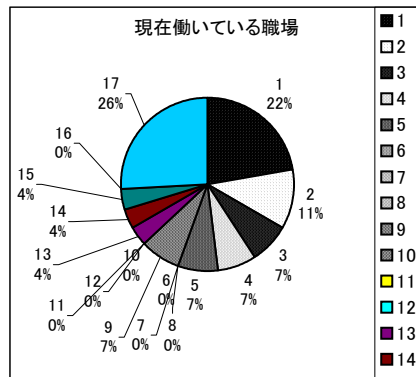
### 勉強会の様子（写真）

#### 2001年度卒業生へのアンケート内容と結果

##### 1. (1) 現在働いている職場について

種別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	合計
人数	6	3	2	2	2	0	0	0	2	0	0	0	1	1	1	0	7	27

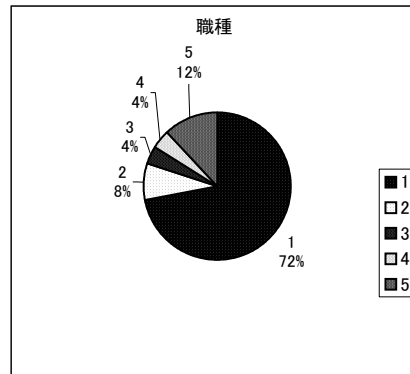
1. 介護老人福祉施設
2. 介護老人福祉施設のデイ
3. 介護老人福祉施設の在宅介護支援センター
4. 介護老人保健施設
5. 介護老人保健施設のデイ
6. 介護老人保健施設の在宅介護支援センター
7. 介護療養型医療施設
8. 介護療養型医療施設のデイ
9. グループホーム
10. グループホームの在宅介護支援センター
11. 社会福祉協議会
12. 社会福祉協議会のデイ
13. 社会福祉協議会の在宅介護支援センター
14. 身体障害者療護施設
15. 身体障害者療護施設のデイ
16. 救護施設
17. その他(総合病院、知的障害者作業所、郵便局、飲食業、重度障害児生活訓練ホーム、障害者ホームヘルプ事業)



##### (2) 職種

種別	1	2	3	4	5	合計
人数	18	2	1	1	3	25

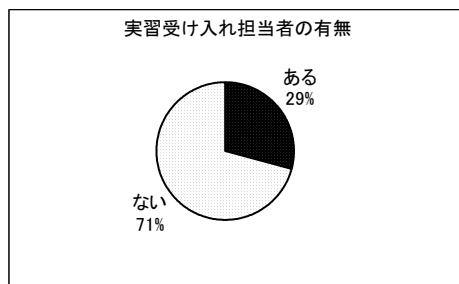
1. ケアワーカー、寮母などの施設直接介護職員
2. 相談員
3. 指導員
4. ホームヘルパー
5. その他  
(外務員、作業全般、支援センターの介護福祉士)



##### 2. 実習生の受け入れについて

###### (1) 担当者になったことがあるか

ある	ない	計
7	17	24



(2) 受け入れをしていて感じたこと(自由記載)

- ・話しをしていて本当にこちらの言ったことを理解しているかがわからない。(反応がない)
- ・はじめて経験することばかりで自分がなにがわからないかわからないこともあると思うが、興味を示してほしい
- ・県短の実習生を受けていれてないのでわからないが、挨拶の出来ない実習生が増えている。また、慣れてくると自分の判断で行動してしまう方mびてこわい時もあった。どういうことを重視して実習してもらえばいいかわからない。私はコミュニケーション重視がいいと思います。
- ・専門学校、高校生、4年制大学が多い。日数が1～3日程度なので、利用者とコミュニケーションをとってもらうことが多い(ユニットケアのため)
- ・やる気のない人とある人の差がありすぎる。やる気のない人に指導する時間をもったいない。自分の理想としない介護をせざるを得ない時に実習生にせつめいするのがつらい。
- ・質問がないと何を知りたいのか何を考えたらいいかわからず、普通に業務にながれてしまい、きちんと勉強できたか不安になる。
- ・やる気のない人とある人の差が激しい。2
- ・初心に戻らなくてはと思う、私もこんな感じだったなと思ひ、わからないのは初めてなので当たり前なので、疑問に思ったことは聞いて欲しい。何かあってからでは遅いから。
- ・学生が対象ではないですが、勉強にきているのに学ぶ意識の薄さ、質問など多いとやる気を感じる。逆にやりすぎになる人もいる。
- ・人それぞれなので、一言では言えませんが、指示がなく動かれ事故をおこしてしまうことがありました。指示をしないと動かないのも困りますが。勝手に何かされると困る。臨機応変に職員も実習生も動かないといけない。
- ・第2～3段階実習では書き物が多いため、実習中に座ってかいているばかりの日もあり、実習時間をもったいなく感じたこともありました
- ・一般常識がない人が多い(挨拶ができないなど)

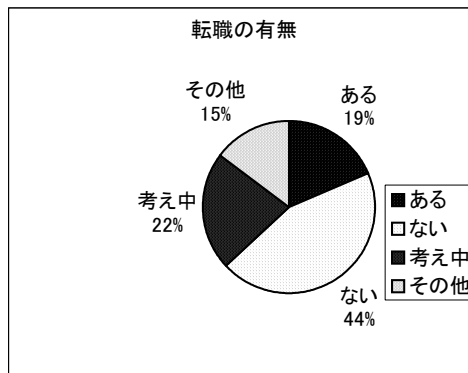
3. 転職について

(1) 転職をしたことがあるか

ある	ない	考え中	その他	計
5	12	6	4	27

・その他

身体上の都合、介護の仕事の前に転職した複合施設なので移動したい、11月から違うところで勤務する予定

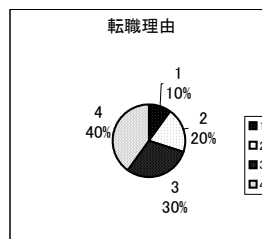


(2) (1)で「ある」「考え中」と答えた方に、転職の理由

種別	1	2	3	4	計
人数	3	2	2	6	13

1. 人間関係
2. やりがい
3. 他の仕事をしたい
4. その他

今の施設がワンマンで金儲け重視、やるべき仕事と思った、精神的な問題、腰痛、体調により夜勤が大変施設長候補となり仕事をしたが、経験が少なく他を勉強したかったから、上司の仕事のやり方



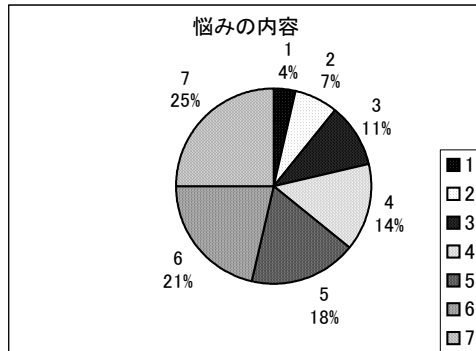
(3) (1)で「ある」と答えた方に。転職したことについて現在の考え、意見

- ・違う仕事をしてみたい
- ・違う仕事をしてみたい単独デイサービスから老健、施設デイ内の主の立場から一番下の立場ということで少しとまどいがある。施設の様子を学ぶ事は出来て良いが雰囲気や自分、その他のスタッフの意見がすぐ長にあげて実行にうつせる点では前の方が良かった。少し後悔。
- ・大変でも前の職場にいたほうが良かった
- ・すべて自分のやるべき仕事に役立っていると思う

4. 現在の仕事の悩みについて

(1) どのような内容か

1	2	3	4	5	6	7	計
3	10	12	14	4	7	5	55

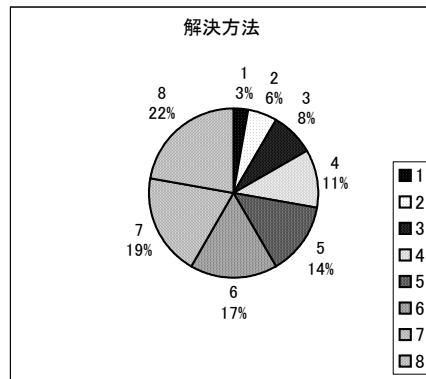


1. 他職種との考え方
2. 利用者の方との関わり方の問題
3. 現場と理想のギャップの問題
4. 上司との考え方の問題
5. 介護職員としての価値観の問題
6. 勤務形態の問題
7. その他

- ・先輩の指導方法
- ・制度からとりこぼされた人への対応
- ・経済的な問題
- ・すべてを開拓・設定していかなければならないところ
- ・施設の経営に対する不安、上の人が介護福祉士の資格をどう意識で必要としているのかわからない。名前がほしいのか、介護福祉士という私が欲しいのか。ここにいるべきか迷っている
- ・慣れないこと、前と比べてしまうこと、人になじめそうもないこと
- ・週2回しかケアに入っていないので、悩みといえるようなものはありません。利用者さんがコミュニケーション能力の高い方なので、その場で話し合い、解決します
- ・介護教室などで講師をする場合、うまくどうやったら教えられるか

(2) それをどのように解決しようとするか

1	2	3	4	5	6	7	8	計
17	12	10	4	7	4	7	4	65

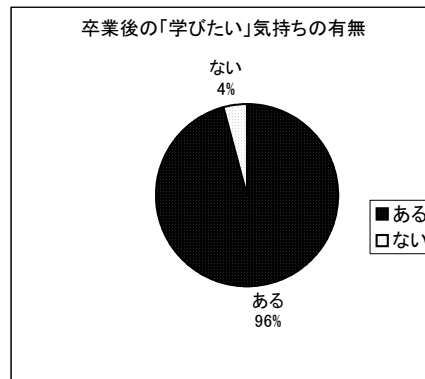


1. 職場の同僚に相談
  2. 上司に相談
  3. 友達に相談
  4. 家族に相談
  5. 本を読んで考えている
  6. 講演や研修に行き、考えている
  7. 自分ひとりで考えている
  8. その他
- ・職安で相談
  - ・内容によっては前の会社の仲間に相談している
  - ・大学の先生に相談
  - ・他の職種に相談

5. 卒業後の「学び」について

(1) 卒業後「学びたい」と思ったことはあるか

ある	ない	計
23	1	24

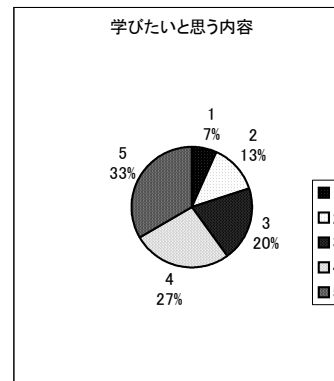


(2) (1)で「ある」答えた方に、特に何を学びたいか

1	2	3	4	5	計
7	12	10	9	3	41

1. 介護技術
2. 医学
3. 相談援助
4. 制度、政策
5. その他

- ・慌ただしい業務の中でどうやって利用者とゆったりした時間をすごしていくか、利用者にゆったりして生き甲斐ある生活をおくってもらうために私たちは何をすべきか
- ・新しい援助技術が日々まれてくると思いますが、新しい情報が常に手に入るような環境であれば・・・
- ・リハビリテーション



6. 県立短大で実習指導で学んだことで、何が一番印象に残っていますか

- ・自分史を原稿用紙10枚に書いたことが一番印象に残っている。今までの自分の人生を振り返ったことはなかったので、良い経験になった。自分をしみじみと知ってこそ、人のこともすることが出来る 2
- ・老人の特徴をレポートにまとめる 2
- ・日誌の評価
- ・実習後の施設ごとの発表 3
- ・高齢者の歴史 2
- ・介護技術
- ・あなたの人生にふれさせてください、という利用者へのインタビュー 2
- ・昔の歌

## 7. 卒業後、何を感じているか(自由記載)

・職員の入替わりがはげしく、いつも人数が足りているかどうかわからない状態で食事、入浴など利用者の生活を利用者のペースではなく、職員の業務として慌ただしくまわっているような状態が続いていて本当に入所している方、ショートの方に申し訳なく感じています。その中でも少しでも利用者のニーズに答えられるようなそんな介護ができれば良いのですが・・・まだまだ何もできていない状態です  
・ボディメカニクスの勉強や車椅子の利用方法(介護者のやり方、本人のやり方、どちらも知っていることで幅広い支援ができます)

・私は+2年勉強できましたが、現場と研究機関のつながりの重要性を感じます。常に新しい情報を互いにやりとりする関係が相互に築けたらすばらしい現場、研究機関になると思います。

・ユニットケアになり、1日の流れ、業務内容、利用者個々の生活、利用者間の関係などいろいろと考えることが多い。  
・在学中、もっとちゃんと勉強しておけばよかった。自分の力ではどうにもならないことが多すぎる、  
・高齢者の接し方は配達時に会う場合にも役に立っている  
・毎日くたくたになるほど現場は厳しい。誰にでも出来る仕事ではない。  
・介護福祉士の地位の低さ。ヘルパー1級の人と大して違いがないような資格だと言われ、つらかった。誰にでもできる仕事という認識

・あれもやってみたい、これもやってみたいと思っても、上司はやったら来年もやらなきゃいけないからだめだと言う。なんのためのしせつなのかととも疑問が残ってしまう。入所施設ではできない通所施設の違いをもっともっといかせる施設にしていかなければ、ならない。

・実習生の時はあそこは良くないと思う、こういう所は直せないかとか思っていたけれど、仕事をしてだからこんなだと思ったり、必ず理由があり、今できる最善の手段なんだと感じた。考えたりしていかなければだめだと思うし、職場内でもっと自由に意見の言える雰囲気があればと思う。

・理想と現実の違いがあることを実感。また、他の施設に比べると利用者が多い分、本当に満足がいくサービスを提供できているのか、また、学生での実習の時のようにゆとりがない。やってみたいこと、思ったことも、頭ごなしにだめだと言われ・・・やりたいことができてないなど感じる。

・前のデイサービスは丁度、私たちからのところだったので、理想の介護を自分たちでつくれた。現在の職場でも新しい(4年目)のためか、理想とのギャップはまだ少ないです。ただ、どうしても業務に追われてしまう部分が多く、利用者ひとりひとりを見切れていないのが現実だと思っています。

・直属の上司がどんどん退職していき、今、上で働いているので利用者との関わり方が少しずつかわってきています。今まで、利用者との1日だったのが今は半分以上事務所なので、パソコン事務処理、他部署との電話連絡ばかり相談業務が多いのももっと勉強しなければと思います。

・資格は必要だが、介護福祉士としての他の職員よりも自分は勝っていると感じたことはない。国家資格って何だろう。介護福祉士として仕事ができているのだろうか。

・職場に関しては不満は沢山あり、また他に興味をもっていることもあるため、転職を考えています。自宅から近いという理由だけで施設を選んでしまったことを後悔している。県外の施設の事情がわからなかった為、地元の友人にたずねるなどする方がいいと思う。短大の友人とは今でも親しくしており、良い時間を過ごしたと思う。

・相談員と介護職員の連携不足や考え方の違いがあると家族とあまり話す機会のない現場の介護職員は十分な介護を行うことができない。

・同年代の利用者さんをケアしながら、日々、こちらの方が学ばせて頂いています。学校で学習したことがすべてすぐ役立つということは残念ながらこちらも未熟で言えませんが、中心になる考え方、支えのようなものが学校で習得できたと感じています。

・働いてから、日々勉強が大切だと思う。今は在宅介護支援センターで主な仕事は相談業務のためいろいろなプレッシャーもあるけど、うまく業務がすすむとやりがいも感じられる。制度も日々変わってくるのでこれからもしっかり勉強していきたい。

・もうすぐ3年ほど今の職場にいますが、(理由があってやめられないため)施設の方針や考え方がころころ変わるため、もうついていけないと限界を感じています。労働基準法なんてほんとにあるの?といたくなるくらい時間的にも金銭的にもルーズです。実習生の受け入れは行っていますが、はっきり言って、実習生がかわいそうです。恥ずかしいです。職場はしっかり見てよく考えてから選ぶべきだったなど痛切に感じています。利用者に関わるのが楽しいからつらいへと変わってしまうなんて思いませんでした。



写真. 1



写真. 2



